
死なない少年と死んだ国

相模御鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死なない少年と死んだ国

【Nコード】

N7456Z

【作者名】

相模御鏡

【あらすじ】

1100年の歴史を誇り600万の信徒を擁する「人間」の組織、光言宗。数多くの不死者と人道を外れた呪術師で構成された「人外」の一団、大群。その二つの衝突が近づく中、死んでも死んでも死に切れない少年、球磨川禊はたった一つのスキルを駆使して、己の欲望を果たすために暗躍を始める。屍姫とめだかボックスのクロス作品です。屍姫とめだかボックスが同じ世界線にあるという設定ですが、舞台はほとんど屍姫のものになります。オリジナル要素は少なめにするつもりです。

序

「ねエ……煙製と焼き肉なら、どっちが好き？」

振袖のように垂れた袖口から、十指に銀の指輪を嵌めた手が伸び、爆発を伴い炎を放った。遠く離れて見ているだけでも、チャイナ服の少女、リオン・リンがたった一人で他二人を圧倒しているのが分かる。

服についた木の葉を払いながら、学生服の少年、球磨川くまがわ襦みそぎは楽しそうに笑っていた。リオンは、上半身こそ首と手首から先しか見えないが、下はうまく覗けば中身が見えそうな程短い。絶対領域を形成する黒のストッキングも、彼の劣情をそそった。

そして敵対している様子の 否、敵対できていたかは怪しいが、少なくとも相対はしていた二人組の、年上に見える女性の方も随分とまた際どい格好をしていた。法衣を思わせる羽織の下は、ビキニのような下着とショートパンツのみ。健全な男子高校生である襦が主に興味を持っていたのは、言うまでもなくこの二人だった。

しかし、おまけにと言えはいいのか、リオンが放った炎熱のお陰で、ノースリーブのセーラーを着ているもう一人の少女の長かったスカートまでもが焼けて短くなってしまうていた。

三人の女子の中へ今すぐにも宝の山だと叫びながら飛び出した襦だったが、彼が抱えている物を見られればおそらく、そこで戦っている三人ともを敵に回してしまうだろう。生まれながらの過負じやく荷かであり生きる過負じやく荷かでもある襦にとって、それは何としても避けるべき事態だった。

『それでも、まあ』 『過負荷マイナスである僕にあるまじき好機プラスだけど、これもさらなる墮落マイナスへのお導きだと思つて』 『ありがたく享受させて頂こうかな』

楔はへらへらと笑いながら、たった一人の少女が二人の女子を蹂躪する様を遠巻きに眺めていた。

毒牙

楔はできるだけ音を立てないように気を配りながら、猛火の拡がりに合わせて後退する。

彼の言うプラスには二つの意味があった。一つは見目麗しい女性一人と可愛らしい少女二人を好きだけ眺められるということ。そしてもう一つは、数での有利に任せて勝利を収めるかと思っていた二人組が、森を焼きながら戦っている一人に押されていることだ。

隙の突き合いで勝たせるつもりはなかったが、一度に相対する数は少しでも少ない方がいい。一対一で、彼が抱えている『それ』とさらに風に乗って聞こえたりオンの長所じやくてんを利用すれば、引き分けに持ち込むことは容易いだろう。彼は勝利に嫌われていても、敗北に病み憑かれていても、引き分けまでなら手にできるのだから。

グラマーな女性が、もう一人の少女を庇った。庇われたとはいえず、せいぜい人間一人分の面積しかない壁だ。はみ出た金髪かみの先が炎に触れ、黒い粉に変わる。

段取りを脳内で再確認する内に、戦いは終わっていた。チャイナ服の少女は不満気に髪をいじりながら、倒れ伏す二人との距離を詰める。

セーラーの少女、異常な身体能力を誇り前衛で戦っていた方の少女は既に身体の修復が始まっているようだが、その少女を最後の一撃から庇った茶髪の女性は全身が真っ黒焦げになる程の火傷を負っていた。その武器である五本の長い長い爪も、すっかり破壊されてしまっている。

この女性の身体は余すところなく人間のものだ。この傷ではもう助からない。リオンはそう判断して、女性を放ったまま少女の方へと近付き、腹を踏みつけ、手を翳かきした。再び彼女の手てに嵌はめた指輪から、炎がちらつく。しかしその炎は酸素を喰らって肥大化することとはできず、そのまま立ち消えることになる。

空虚を帯びた言葉がリオンを打ったからだ。

『あーあー』 『まったく、もう』 『酷いことするなあ』 『まあ戻す
からいいけど』

「な……ッ!？」

突然背後に現れた気配に驚き、リオンが振り向く。リオンと同じ
黒髪で、彼女の知識の中では学ランと呼称される服を着た少年が、
長い爪を使っていた女性、あらがみりか荒神莉花の身体に触れている。触れられ
た莉花の身体は、彼女が彼女であると認識できる程に回復していた。
火傷の痕が消えている。どころか、焼けた筈の服までもが再生し
ている。リオンが自身の驚愕を理解する間にも、焼死を司る焚鬼ふんき
によってつけられた傷は巻き戻るように修復されていく。

「お前……何をしてる! お前は何者だ! 何処から来た! 如何
してここにいる!」

怒りで動揺を包み隠し、怒号を浴びせる。目の前で女性に触れて
いる少年は、焦りを隠し切れないリオンとは対照的に漫然ゆっくりと立ち上
がる。そのゆらゆらした動作が、リオンに不快な印象を与えた。し
かしその印象を噛み砕く暇もなく、さらなる驚きがリオンを襲う。

螺子が、通常より遙かに巨大な、小太刀くらいの大きさの螺子が、
彼の両手に握られていた。

それも土の中にある鉄を集めて構成したとかそういう類の、理屈
でこじつけられそうな現れ方ではなく、本当に忽然と出現したのだ。
空間を掻き分けて、突如。空間を擦じ曲げて異空間から取り出した
かのように。

幻覚系の能力を疑ってみようにも、これだけはつきりと禍々しく
質量を持たれては疑いようがなかった。仮に幻覚だったとしても、
この螺子は現実にさえ干渉してしまうのではないか。そんな疑念も
鎌首をもたげ、次から次へと心という坩堝で疑惑の渦を成す。

張り付いた笑みが、おどろおどろしい螺子をリオンに向けて構え
る。

何が起こっているのか、おおせいのけがれ大群の、言わば理解を超えた理外の集団

の教主を務めるリオン・リンにすら理解できなかった。彼女は彼女で、それなりに理を外れている自負があつたが、しかしこれは例外が過ぎる。

彼、球磨川楔の使っている『大嘘憑き』という過負荷自体が本来、人智理解の範疇から排斥され物理法則の制約を無視した代物なのだが、教主である以前に僵屍仙であるリオンにとって、その理解できない力こそが、その世界に拠らない力だけが、自身の存在を脅かす力だつた。

だから警戒した。彼女の全神経で楔を捉える。僅かでも楔が動けば楔を正面に据えて構え、荒神莉花と天瀬早季との戦いで崩れかけた焼死の指輪を含め、他の十の死の指輪を、余力を残しつつ解放する。

(余計な能力を使わせる前に 殺す！ 殺し尽くす！！)

結果を先に言ってしまうえば、楔はリオンの隙を突いた。リオンの集中力と警戒心の間を縫って、だ。

隙を突かれる直前まで、リオンの瞳は死んでいなかった。いかに目の前の人間、あるいは屍が強かろうとも、自棄になりかかつても尚。もちろん、自分の十の死の鉄壁は決して崩されることはないという自信もあつたのだろう。

さらに言えば、どれだけ能力を持つていようが、楔の武器が螺子であつたこと、彼女にとって見慣れたものをただ巨大化させただけのものであつたこと、それが彼女の心に生まれた隙を加速させた。そして。

『質問が多いなあ』『リオンちゃんは』

球磨川楔という少年は、ありとあらゆる弱点を知り尽くしている。リオンの自信が生んだ油断を、そんな彼が見逃す筈はなかった。

彼の過負荷は、彼女の呪いの下を、悠然と掻い潜った。

それは、ハードルは高ければ高い程潜り易い、という言葉の体現のようだった。

「な、あ、え……？ 嘘………」 「焼死、凍死、感電死、撲死、斬

死、餓死、病死、毒死、溺死（窒息死）、圧死という十の死を各々が司っていた銀の指輪は、一瞬にして易々と貫かれている。

それでいて、リオンの手には傷一つない。背後に転がる十の螺子が、確かに彼女の十死の指輪を砕き、彼女の十指を貫いた筈なのだ。『まず一つ目の質問だけどー、僕はただ単に僕のスキルを行使したただだよ』『「大嘘憑き」っていうんだけどね』

楔は肩を竦めて掌を広げ、にこにこしたまま語り始めた。

無論、リオンにその話を聞く余裕はない。自分の無敵を保証した指輪が破壊されてしまったのだ。何より彼は、何もない空間から螺子を出現させる能力があるようだった。そしてそれは幻覚ではなく、少なくとも彼女の十の死の指輪に干渉できる程の質量を持った存在であることが、ここで証明されてしまった。まさか、またさっきと同じように、同じことができるのではないか？ もしできるならどうなるか。

今、彼女の十指に、指輪は、ない。

そこまで考えてから、リオンははっとしたように楔を見た。へらへらと笑うその顔が、どこまでも傍若無人に映った。が。

『そして第二』『僕は球磨川楔』『健全で負完全な過負荷マイナスの極値を名乗らせてもらってる、一介の男子高校生さ』

彼の身体は細身で、服の上からでも脆弱さが見てとれる。こんな脆弱にすら、隙を突かれれば、自分は、こんなにも、脆い。そして弱い。どちらが脆弱だ。誰が無敵だ。『誰の敵として扱おうにも不足する』という意味では、この男だって無敵ではないか。

（私は　どっちだ？）

虚勢の怒りを込めて楔を睨みつけてみても、向かう所敵無し of 少年はびくりともしない。

『三の巻は簡単明瞭、この近所の住宅街に僕の家がひっそり佇んでいたというだけだよ』『物珍しさでこんな所へ立ち入れてしまうくらい近くにね』『さて、残る最後の一つへの回答だけど』

楔がリオンの双眸を見つめて、一つ呼吸をした。

(来る　　！！)

『それは』

すつ、と。

『ここに倒れている彼女と、僕との距離を「なかったこと」にしたからだ。』

十メートルは離れていた距離を、一步も動いたように見えないまま楔が詰めて見せた。

否、それよりも

「ひ、い!？」

『こんな風にぐふう!？』恐怖のあまり、リオンが楔の腹を蹴り飛ばす。ただそれだけで、柔な鍛え方すらしていない彼の身体は倒れた莉花の上を越え、焼け焦げた木へと衝突する。背中からごきりと嫌な音がして、ぐたりとした身体がそのまま地に落ちた。

しかしリオンの表情は硬直したままだ。

たった一瞬。ただの一瞬の出来事だった。

ただ唐突に距離を詰めただけの楔の表情が、それを間近で見たりオンの脳裏へと刷り込まれた。

日本に来る前も、日本に来てからも、様々な人間を殺したし、色々な屍を狩った。蜃や仙狸の幻術には心底驚いたし、火鳥や火鼠には可愛いという思いを浮かばせてもみた。のっぺらぼうや海坊主にはその木偶の坊振りに呆れ、製作者を殺した現場に居合わせたことのある麒麟や牛魔王に関しては、斃した後でその不格好さに腹を抱えて転げてしまった経験もある。

しかしこれは、そのどれとも違う。

生きている人間の身体に、屍の未練と妄執を放り込んでしまったような、矛盾を孕んだ悍ましさがあった。

そして自分が蹴り飛ばした男は、たった今致命的な音を鳴らした筈の背中をさすりながら、立ち上がった。

「あ……………い、嫌! どうしてよっ! 何で、今、だってお前は、お前の背中はツー!」

目から流れ切れない涙が鼻へと逃げていき、鼻水のように彼女の唇に垂れる。くしゃくしゃの泣き顔を前にしても、楔はまだ、足を止めない。

『大丈夫だよりオンちゃん』 『きみの涙も嗚咽も弱音も』 『僕がぜんぶぶなかつたことにしてあげるから!』

彼の湛える不鮮明な笑みが濁った視界を通じてリオンに届く。彼の放った不気味な言葉が鼓膜を通じてリオンに届く。最早、楔が笑っているのかなど関係なかった。楔が何と言っているのかも気にしていられなかった。リオンは只々謝り続ける。

しかし楔は、リオンの目の前に立つと、すつと手を差し出した。右手を、握手を求めるように、彼女の眼前へ。

「お、おねが、い……」

眼球でも潰されるかと思っていたのだろう、彼女が一度閉じた目を開くまでに数秒を要したが、彼はその間もずっと状況に不似合いな笑みを消すことなく、気味悪い気配を振り撒き続ける。

『そこまで言うなら、そうだなあ』 『うーんと、そうだ!』 『僕と正々堂々対等な立場で、公明正大に取引でもするとしようか』

楔は言い放った。一切の代償を求めず自己の権利すら投げ打った少女に対して、彼は改めて取引という名の命令を持ちかけた。

従わなければ殺される。そんな前提で取引も何もあったものではないが、彼はあえて取引という言葉を用いた。

『こちらからは三つ』 『きみの命を助けること』 『僕がついこの間、きみ達から拝借した屍法姫經典とかいう書物の引渡し』 『そして僕の「大嘘憑き」による、きみの十の死の指輪の回歸』 『破格の条件だと思っぜ』 『さらに、きみからの条件は、そうだなあ』 『可愛い女の子への骨折り大サービスということ』 『たった一つで構わないよ』

希代の最弱、球磨川楔は、光言宗と大群という二つの巨大に対し、一つ目の毒牙を、小さくも確実に突き立てる。

『僕の屍姫になって欲しいんだ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456z/>

死なない少年と死んだ国

2011年12月25日01時06分発行